

■今月の特選句

2019年5月



身につきし我慢宝に卒業す

横山喜三郎

この子は成績はパツとしなかったけど根気強くなったねえ。「学力よりも我慢が宝」とは納得の人生訓。何事も継続は力なり。俳句もそうだわね。



花好きに取り巻かれたる標本木

門田智子

今日こそ開花宣言されるかと、愛好家は虫眼鏡を片手に標本木の蕾を凝視。この光景は、桜好きの日本人の共感を呼び、可笑しい。



春泥や何するんできいへらぼうめ

土屋泰山

こちとらなりたくて春泥になったわけじゃねえんだよ。このオタンコナス。チョコザイな雪が降ったら長靴履いて歩いてんだ。馬鹿野郎。



## お揃いで真面目に咲いてチューリップ

山本 賜

チューリップには邪心がない。複雑がない。色も形も単純明快。真面目で純真だからからかったりできないタイプである。直立でハイと大きな返事。



## 春の鬱まともなる句を駄句といふ

村山好昭

俳句の「俳」は、「滑稽」という意味である。勝手に言ってるんじゃないくて、文学の歴史書、辞書に書いてある。滑稽俳人こそ、まともなんだけどね。



## 踏青や手にドローンの操縦桿

工藤泰子

踏青にドローンが登場しましたか。想像しただけで楽しい緊張感とワクワク感があるね。「踏青」という伝統的な季語が、まったく新しくなった。

## ■今月の秀逸句（・・・七七をつけてみました）

花見弁当スーパーの勝負どこ ・・・見た目重視か味を重視か	井口夏子
忘れたることはさておき茗荷汁 ・・・小さい事にくよくよするな	稲沢進一
花筵大の字になり風抑ふ ・・・四肢の長きにものを言はせて	柳 紅生
鬼の形相つくし摘む友は ・・・ジキル博士がハイド氏になる	吉川正紀子
恋人が出来たか春のデイサービス ・・・急にいそいそ出かけ始めて	田中早苗
あゝ言えばこう言う古妻かたつむり ・・・口では勝てずだんまり作戦	青木輝子
充電が済めば放電猫の恋 ・・・電気料金に換算してみむ	稲葉純子
改元をしても五月は五月かな ・・・令和最初のピカピカなれど	西をさむ
花疲とは幸せな人が云ふ ・・・不幸な人は端 <sup>はた</sup> から疲れ	土屋虹魚
猟銃のやうに抱へて春財布 ・・・こいつあ春から威勢がええわい	桑田愛子
啓蟄の穴から首を出して何処 ・・・自分が誰かは分かっているね	本門明男
落つる時を囁き交はす椿かな ・・・示し合はせて碧梧桐待つ	井野ひろみ
MとL両方試着春の服 ・・・お腹出したり引つ込めたりと	堀川明子

## ■今月の滑稽句

\* 今月の特選句・秀逸句以外の佳句を青字で表示しています。

悪じられて叱られている四月馬鹿  
 話す手は猫をなでおり日向ぼこ  
 囀りの枝移りつつ樹を去らず  
 古妻がボケ鷹化して鳩と為る  
 ライバルに栄転をされ四月尽  
 娘嫁ぐか久々の雛飾り  
 春眠や慌てて降りる次の駅  
 孫入学我れはシルバーセンターへ  
 見るほどにつくづく愛(いと)しつくづくし  
 漱石の墓や恋猫徘徊の  
 雛を皺と読み違へたる目の老化  
 花人に幸せだけをあげましょう  
 場所取りは桜桜の散る所  
 時ならぬ百花繚乱卒業式  
 青春を黒一色に染め入社式  
 頷いて愚痴を聞いている黄水仙  
 我が庭に出前ライブの春告鳥  
 春疾風茶筌転がる野点席  
 山笑う姥捨て話で山登り  
 並び立つ彼岸桜と姥桜  
 万葉の梅の歌から令和咲く  
 四月馬鹿舌を抜かれて地獄へと  
 サッカーボールバットで打って春休み  
 唐様に咲く梅林の売地札  
 令月や平和を照らす昼の月  
 特攻の桜花に捧ぐ令和かな  
 黄金がプラチナとなる十連休  
 しらじらと明けて白梅匂ふかな  
 春の夜や月の裏へも人行ける  
 満開や何処かに花咲翁がゐる  
 あちこちで悪さをしたる春疾風  
 入園や祖父母四人の王子様  
 彼岸会や高血圧と住職も  
 甘い夢の麻酔にかかり目借時  
 ファミレスのフォークがダンス春の昼  
 嘘に本音のちらついて四月馬鹿  
 鳥のおおちゃく古巣をリサイクル  
 人住まぬ生家となりぬ犬ふぐり  
 人の世も人事異動や春落葉  
 風温しもつこう薔薇の一輪に  
 シャンパンを抜き夜桜のオトナ女子

相原共良  
 相原共良  
 相原共良  
 青木輝子  
 青木輝子  
 赤瀬川至安  
 赤瀬川至安  
 赤瀬川至安  
 荒井良明  
 荒井良明  
 荒井良明  
 井口夏子  
 井口夏子  
 池田亮二  
 池田亮二  
 石塚柚彩  
 石塚柚彩  
 石塚柚彩  
 泉 宗鶴  
 泉 宗鶴  
 泉 宗鶴  
 伊藤浩睦  
 伊藤浩睦  
 伊藤浩睦  
 伊藤洋二  
 伊藤洋二  
 伊藤洋二  
 稲沢進一  
 稲沢進一  
 稲葉純子  
 稲葉純子  
 井野ひろみ  
 井野ひろみ  
 上山美穂  
 上山美穂  
 上山美穂  
 梅岡菊子  
 梅岡菊子  
 梅岡菊子  
 梅野光子  
 梅野光子

御開帳の如来の優しうば桜  
 藤咲きて蘭咲き娘等咲き吾も咲く  
 スーパーの棚はからつぼ春の夜  
 三代に亘る生徒や筆の花  
 身に余す眼持ちよる白魚かな  
 好きな木や嫌いな木にも鳥の恋  
 人の息街を消したる花筵  
 救急車の音に驚く春の雷  
 ことごとく採られてしまひつくしん坊  
 閑けさの初音に裂かれたる墓参  
 雑草のぐんぐんぐん五月蠅さよ  
 藤房のしぼみ地面にまだらの陽  
 花は葉に魅惑の萌黄色となり  
 目も鼻も小っちゃいくせに花粉症  
 心して詠まねばならぬ桜かな  
 だらだらと田舎の葬儀日永かな  
 乳房抱きとも大砲寺の乳母桜  
 入学式カワイイ・ヤバイで盛り上がり  
 クレソンをていれぎと言ひ伊予に住む  
 春財布縁起をかつぐ緑色  
 れんげ田の筵にひろげ母の味  
 蛞蝓と父に言われし日々もあり  
 病床の子規に一杯のワインを  
 ゲノム食品の人体実験万愚節  
 元号は「寿司」だとかエイプリルフール  
 「令和」と発表する人ヒヤシンス  
 候補者は花見の客の手を握る  
 ぼつちやりと育つ春子を剥がしけり  
 木瓜赤し牙もあるある棘もある  
 啓蟄の文字にムズムズしてしまう  
 春の雨タルトのの字やはらかに  
 そのメタボ山に笑はる露天風呂  
 とりあへず名刺代はりの春一番  
 水ぐり二度の勤めにゆくクレソン  
 帰省した孫を見上げてからだ反る  
 春の屋根庭の雀が恋をして  
 水替へてもらい金魚の安堵かな  
 若草山芽生えを漁る神の鹿  
 涅槃図や泣く弟子よりも隅の猫  
 昨年の新茶大事に冷蔵し  
 やけに滑る廊下であるよ大試験  
 杉の花涙もろさは親譲り  
 居酒屋にアポ電入れる新社員

梅野光子  
 太田史彩  
 太田史彩  
 太田史彩  
 大林和代  
 大林和代  
 大林和代  
 小笠原満喜恵  
 小笠原満喜恵  
 小笠原満喜恵  
 岡田廣江  
 岡田廣江  
 岡田廣江  
 小川鮎太  
 小川鮎太  
 小川鮎太  
 加藤澄子  
 加藤澄子  
 加藤澄子  
 門田智子  
 門田智子  
 金城正則  
 金城正則  
 金城正則  
 久我正明  
 久我正明  
 久我正明  
 工藤泰子  
 工藤泰子  
 桑田愛子  
 桑田愛子  
 小林英昭  
 小林英昭  
 小林英昭  
 近藤須美子  
 近藤須美子  
 近藤須美子  
 佐野萬里子  
 佐野萬里子  
 佐野萬里子  
 下嶋四万歩  
 下嶋四万歩  
 下嶋四万歩

恋の如突如羅患や花粉症  
 春バーゲン得する気分に釣られ買ふ  
 青空にプリマドンナや揚雲雀  
 師の影をめつたやたらと踏み卒業  
 辞世の句ぼつで長生き春愁ふ  
 雲隠れしたる太陽野火走る  
 四月馬鹿遊ぶつもりが遊ばれて  
 ドンホセを誘惑するや紅椿  
 AIにこき使われる四月馬鹿  
 法の山枝垂桜の薄明かり  
 抱かなきゃ分からない春キャベツ  
 桜がサクラでいる内に会いたいね  
 たんぽぽの掟です 午後閉じる  
 雛の間に部屋を取られて雑居寝かな  
 陽炎や気分は花金屋の酒  
 春昼や令和と決まり仮名おどる  
 七八九して花の句十句作りたる  
 二人静我等ポンコツ夫婦なり  
 何食わぬ顔してものの芽太りたる  
 焼きカレー匂ふ浅春の喫茶店  
 荷台にて花見弁当に人と犬  
 春暑しインコいちゃつく待合室  
 啓蟄にほつと一息してをりぬ  
 つぶやきに真実のありすみれ草  
 春の夢天界からのメッセージ  
 二千元札は何処へ春霞  
 沈丁花鼻寄せずとも香りゐる  
 桜咲く新元号を祝福し  
 ふらここの高さを競ふ子等の声  
 花冷や別れた上着に再会の  
 物忘れと失念は別木瓜の花  
 花冷や鼻の機嫌が悪くなる  
 俺だけはの自信失ふ四月馬鹿  
 腰伸ばし腰折れた葦ザクと切り  
 花粉予想見たくは無いが見なければ  
 花冷にも限度があるぞと母吠える  
 令和てふ漢字は漢字山笑ふ  
 桜吹雪の朝かつらも便乗  
 枝付きの桜盗人から貰ふ  
 春泥に嵌るまぬけはヒトばかり

壽命秀次  
 壽命秀次  
 壽命秀次  
 白井道義  
 白井道義  
 白井道義  
 水夢  
 水夢  
 鈴木洋子  
 鈴木洋子  
 鈴木和枝  
 鈴木和枝  
 鈴木和枝  
 高田敏男  
 高田敏男  
 高田敏男  
 高橋きのこ  
 高橋きのこ  
 高橋きのこ  
 龍田珠美  
 龍田珠美  
 龍田珠美  
 田中 勇  
 田中 勇  
 田中 勇  
 田中早苗  
 田中早苗  
 田中晴美  
 田中晴美  
 田中晴美  
 田村米生  
 田村米生  
 田村米生  
 月城花風  
 月城花風  
 月城花風  
 土屋泰山  
 土屋泰山  
 土屋虹魚  
 土屋虹魚

転んだら起き上がれない花の下	飛田正勝
七人の敵なつかしや春彼岸	飛田正勝
花疲れ一休みする駐在所	飛田正勝
亀鳴くの鳴かぬ談義に知らん振り	西をさむ
万葉集読めず蛙の目借時	西をさむ
大天守見上げる顔見て山笑う	花岡直樹
燕の巣家賃払えと糞害す	花岡直樹
平成に句点を打ってビール飲む	花岡直樹
無添加にあらず黄砂入り春の風	林 桂子
一群は茶髪のままの新社員	林 桂子
開花宣言できぬ桜に人ばかり	林 桂子
一年生からだ半分らんどせる	原田 暉
貼り紙の「貼り紙禁止」万愚節	原田 暉
三月尽ホワイトデーも恙無く	原田 暉
のどけしやアンドロイドの観世音	久松久子
里山を煙に巻いて伊賀の野火	久松久子
肩もみつマスクの中の大欠伸	久松久子
春の田にごくごく水を飲ますかな	日根野聖子
たわい無き話を笑ひ春炬燵	日根野聖子
いく度も空に切り込み燕かな	日根野聖子
開花宣言本当なのか四月馬鹿	廣田弘子
「米朝首脳会談」シャッフルされて冴え返る	廣田弘子
花粉症のマスクに隠すしわとしみ	廣田弘子
標本木責任重き桜かな	細川岩男
待ち切れぬ飲兵衛供の花見かな	細川岩男
満開の桜天下を独り占め	細川岩男
おねだりの才能で生き燕の子	堀川明子
痛風へ付度は無し春疾風	堀川明子
草餅の薫りも色もひと口に	本門明男
雛あられ米寿の吾のかみしめる	本門明男
受験子戻るVサインの手を高々と	南とんぼ
百寿の葬ピンクの薔薇を溢れさせ	南とんぼ
春の雪春のコートで震へをり	南とんぼ
麗かや鉄道電話の呼出音	宮村方圓
風車育てなくても子は育つ	宮村方圓
本当の寫實を學ぶ復活祭	宮村方圓
ネズミ取りあるぞあるぞと鳴く蛙	椋本望生
杉咲くや天狗の鼻もティッシュ詰め	椋本望生
緋目高を覗く向かうに猫の髭	椋本望生
花冷やあつき心をもて遊ぶ	村松道夫
春の夜やねむたき妻の熱き手よ	村松道夫
春セーター胸のときめき高まれり	村松道夫

さふいへば四月の馬鹿の日であった  
 花よりも団子といひて三本目  
 花衣雷雲に追ひつかれ  
 町の名のいつしか消ゆる諸葛菜  
 散る桜昭和も遠くなるばかり  
 人生の道のりほどの露のすじ  
 鯉幟みんな銜えし命綱  
 麦の穂にちよっかいを出し猫のヒゲ  
 特急の窓から見つけ鯉のぼり  
 わかります姿勢良いのが新社員  
 お散歩の蝶に歩幅をあはせけり  
 宿酔(ふつかよい)醒めず覚まさず大朝寝  
 ブラウスの透けてをりけり春の情  
 今更のチャンネルの五番ナンセンス  
 躑躅咲く通学路は今プレミアム  
 百均のバケツ小さく潮干狩り  
 鈴蘭のまわりが何か澄んでいる  
 花の宴失敗談を肴とし  
 伯楽は手足を出さず青き踏む  
 足元の山がほころぶふきのとう  
 桜咲く一夜のどか雪花の乱  
 三又や紙幣刷新されるとか  
 連翹のどこに挿そうがよく根付く  
 子たくさん願う役所の鯉のぼり  
 つばくろに住宅難のあるまいよ  
 閑さや桜待ちある大鳥居  
 桜餅盛りたるやうな桜山  
 鬼の座す鬼北庄屋の座敷雛  
 オムレツの色に出にけり寒卵  
 チューリップ生産工場遊園地  
 認知症逆手にとりて木の葉髪  
 干布団気の晴れるまで叩きをり  
 終活の遍路追ひかけ花ふぶき  
 ほっといてシャイな桜のひとり言  
 舗装路の割れ目より出ですみれ草  
 猪の予想だにせぬぼたん鍋  
 雛壇に鎮座やスナックのお菓子たち  
 半夏生身丈に合はぬ役は厄  
 もどかしや桜隠しの雪積もる  
 言ひ違ふ三日見ぬ間の桜かな  
 春の鴨おどさぬようにウォーキング  
 卒業の名残断ち切る高速船  
 玉子焼こげ目をおだて春休

村山好昭  
 村山好昭  
 百千草  
 百千草  
 百千草  
 森岡香代子  
 森岡香代子  
 森岡香代子  
 八木 健  
 八木 健  
 八木 健  
 八洲忙閑  
 八洲忙閑  
 八洲忙閑  
 八塚一青  
 八塚一青  
 八塚一青  
 柳 紅生  
 柳 紅生  
 柳澤京子  
 柳澤京子  
 柳澤京子  
 柳村光寛  
 柳村光寛  
 柳村光寛  
 山下正純  
 山下正純  
 山下正純  
 山本 賜  
 山本 賜  
 横山喜三郎  
 横山喜三郎  
 横山洋子  
 横山洋子  
 横山洋子  
 吉川正紀子  
 吉川正紀子  
 吉原瑞雲  
 吉原瑞雲  
 吉原瑞雲  
 渡部美香  
 渡部美香